

## インフォメーション

### イベント報告 さいたまトリエンナーレのプレイベント



2016年秋に開催される、さいたまトリエンナーレ2016に向けたプレイベントが、8月の「種は船プロジェクトinさいたま」を皮切りに次々と進められた。都市づくりNPOさいたまメンバーが多く参加している「さいたまスタディーズ」も、10月から会場を移しながら、全6回の連続セミナーを開催した。つくたまでは、開催前～開催中を通じて、市民の立場、まちづくりの視点からトリエンナーレに参加していきたい。他の市民活動団体とも協働した、まち歩きイベントなどを計画中。

### イベント報告 上尾区画整理地区公園づくり



2年前から芝浦工業大学と協働で、上尾市大谷北部第四土地区画整理事業地区内の8箇所の公園整備プロジェクトに取り組んでいる。2015年4月に一番目となる3号公園が竣工、2015年度は2号公園と7号公園の整備を進めてきた。特に、7号公園は既存の樹木を活かした特徴ある公園で、冒険遊びのような管理運営を地域の人々にしてもらえよう、公園の使い方を体験するワークショップを2月27日に開催した。2016年度も引き続き、1号公園と4号公園の実施設計と施工を予定。

### イベント報告 丹過長谷川蔵の保全活用事業



2015年後半から、つくたまは岩槻区に現存する明治10年ごろに建築された土蔵造りの商家を保全活用する事業を着手した。持ち主の保存意向は強く、日頃お付き合いをしている岩槻区在住の会員はその気持ちを理解しながら、地域の財産として活用するイベントを中心に事業を展開している。岩槻は人形の町と言われているが、その前に木綿の町であったこと、城下町の痕跡が色濃く残っていることなどを知ることができた。

2016年度にも、マッチングファンド事業を活用して、地域の人々と一緒に長谷川蔵の保全・活用の方向を考えていく予定。さいたまトリエンナーレとの連携も目指していきたい。

### 5/8(日) 第9回アートフルゆめまつり開催

【主催】アートフルゆめまつり実行委員会  
【場所】大宮駅周辺

春の大宮駅周辺の街角を会場に、参加者自身の手でイベントを作り上げる、市民のイベント。今年は街角など15会場で、音楽、パフォーマンス、展示、パレードなどさまざまなアートが街を彩る。  
<http://www.aymo.jp/>



### 募集 都市づくりNPOさいたまは 正会員、賛助会員を募集しています。

- 正会員 (年会費10,000円) : 当会の趣旨に従って事業に主体的に参画していただける個人の方で、法律上NPO法人の「社員」となります。年度一回の総会に出席して議決権を有します。
- 賛助会員 (年会費5,000円/口・年度を1口以上) : 当会の趣旨に賛同し、金銭的な支援をいただける個人または法人の方。法律上NPO法人の「社員」ではありませんが、当会から情報提供を受けられます。

### 募集 都市づくりNPOさいたま情報紙「つくたま」の発行に 協賛を募集しています。

協賛金10,000円でこの欄に協賛いただいた方の記事(広告やイベント告知等)を掲載いたします。

各お申し込み・お問い合わせは下記「都市づくりNPOさいたま」まで

**つくたまとは?** | つくたまは、都市づくりNPOさいたまの愛称です。つくたまは、市民のまちづくりへの参加を支援し、まちづくりの新たな価値の提案や、具体的まちづくり活動を実践して、市民がまちづくりの中心にある社会を目指す特定非営利活動法人です。

#### つくたまの主な活動

- 調査及び研究事業  
見沼景観形成ビジョン研究会/埼玉景観整備機構活動(景観DBの活用を含む)/高沼用水の整備に関する検討/つくたま塾の開催/さいたま景観普及活動/上尾市区画整理公園実施設計業務/上尾市大谷第四地区区画整理町界・町名変更検討業務/東大宮商店街地域つながり力アップ支援事業/5つのワーキンググループ活動
- 情報発信事業  
Webサイト、FBの運用/つくたま情報紙の発行
- 普及、人材育成事業  
研修旅行/講師派遣
- コーディネート、ファシリテート事業  
氷川の杜まちづくり協議会/JR環境空間「河童の森づくり」に関する支援/「河童ぶち公園整備」に関する市民参加のコーディネート/さいたま・まちプラン市民会議の事務局支援/見沼区民会議活動支援業務/中央区民会議活動支援業務/南区民会議活動支援業務/アートフルゆめまつり事務局支援/岩槻・丹過長谷川蔵保全活用計画
- 市民活動支援事業  
市内各地区の地区計画検討支援/芸術文化を活かした地域活性化事業~美術と街巡り・浦和(仮称)
- その他の事業  
さいたま市福祉のまちづくり推進協議会/さいたま市地域包括支援センター運営協議会/埼玉県景観審議会/つくたまアクションプランの検討

●編集・発行/2016年3月(通算第5号) ●デザイン・編集協力/藤巻 武士、松尾 英香

**特定非営利活動法人 都市づくりNPOさいたま**

〒336-0917 埼玉県さいたま市緑区芝原2-16-21 (地域生活デザイン内)  
tel & fax : 048-876-1782 e-mail : jimu@tsukutama.info  
<http://www.tsukutama.info>

## 都市づくりNPOさいたま情報紙

# つくたま

都市づくりNPOさいたまは...

市民のまちづくりへの参加を支援し  
まちづくりの新たな価値を提案し  
具体的まちづくり活動を実践して  
市民がまちづくりの中心にある社会を目指します。

vol.05  
March.2016



## 特集 P.2

# さいたまから考える 生物多様性まちづくり

### 【今号の表紙】

さいたま市の台地とそこに複雑に入り組んだ谷戸、そして荒川や元荒川の広大な低地では、太古から人々が生活を営み、自然と共生してきた。一方で戦後数十年、環境は大きく変化してきた。多くの市民が環境保全に取り組んでいるが、都市と自然が近接するこのまちで、果たして生物多様性を保全していくことができるだろうか。

### つくたまプロジェクトレポート P.5

#### つくたまの見沼田圃プロジェクト

### つくたまの人々 P.6

#### 中口 毅博 さん

[ 芝浦工業大学システム理工学部教授 地域創生・環境政策研究室 ]

### まちづくりNPO紹介 P.7

#### 埼玉県生態系保護協会・大宮支部

### インフォメーション P.8

# さいたまから考える 生物多様性まちづくり



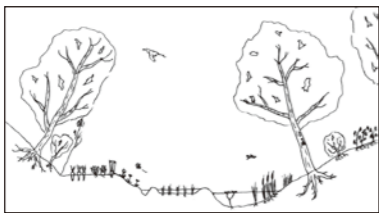
緑区南部領辻の谷戸には、昔のままの里山が残っている

## 生物多様性が豊かだった、さいたま市

さいたま市地域は、太古の昔から気候風土に恵まれた環境の良い場所である。そのことは、縄文の昔から途切れることなく人々が生活してきた痕跡が、市内各地に確認されることにも証明されている。

荒川・入間川や元荒川の雄大な流れと、その氾濫原に広がる肥沃な大地、大宮台地を囲み入り組む浅い谷戸などにより、多様な地形が構成されていることが基盤となる。地球上でもっとも多く生きものが生息するのは、陸域から水域へと連続的に変化する「エコトーン」と言われており、低地と台地が入り組んだこの地域はまさに、多様な生きものの生息の場であった。

稲作が広がってからは、低地の田んぼ、斜面や台地上の雑木林や畑を上手に利用する農の営みの中で、いわゆる里山における「多様な生きものとの共生」が続けられてきた。



エコトーンとは、環境が連続的に変化する場所を意味する

## 今そこにある危機 = 「エコトーン」の消失、乾燥化、屋敷林の消滅

こうした関係性は、さいたま市域では高度経済成長期以降に大きく変化している。住宅などがスプロール状に広がり都市開発が台地でも低地でも行われ、農地でも効率化・大規模化に伴い排水路や道路が整備され、環境の多様性と

連続性＝エコトーンが失われていった。都市化によって大地は水を蓄えることができなくなり、地域の乾燥化が急激に進んでいる。

最近では、先人が災害防止のために大切に、わずかに残っていた屋敷林や斜面林、社寺林が、次々に姿を消している。永きにわたり維持されてきたこうした場所には、知られざる貴重な生物が生息していることも多い。

人口減少が始まった現代においても、さいたま市ではまだまだ都市開発が活発だ。時代の変化の荒波を乗り越え、かろうじて生き残ってきた生物多様性の場を将来に残すには、待たなしの状況であると言える。

## 生物多様性とは

生物多様性の基本概念は「地球上には多様な生物が存在し、それらが多様に関わり合うことで生存が成り立っている」とされている。①生態系の多様性、②種の多様性、③遺伝子の多様性の3つの多様性から構成されており、私たち人間のいのちと暮らしは、生物多様性によりもたらされる恵みによって支えられている。

一方で、生物多様性の保全は、特定の種「のみ」を保全するのではなく、それを取り巻く多様な生きものとその環境を対象としている。個人の庭に生えている草木やそこに息づく昆虫たちもまた、生物多様性を支える重要な要素であるという考え方だ。

2010年に名古屋で開催されたCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）では、人の営みによって維持されてきた多様な環境を保全することの重要性を謳った「里山イニシアチブ」が採択され、話題となった。

## 生物多様性保全の取り組みの現状

さいたま市には「手つかずの自然」は存在しない一方、長きにわたり人が手をかけ続けることで維持されてきた環境が生物多様性の基礎を成している。このため、市民が「自分事」として身近な現場から保全するという意識が社会に浸透することが、大切な一歩目になる。

さいたま市では、環境基本計画に基づき、いくつかの取り組みを始めている。生物多様性データの充実に向けては、さいたま市環境会議と協働で「みんなの生きもの調査」を平成25年度より開始。市内数カ所に設置した調査施設を中心に、継続的な生物調査を市民参加で行い、生きものデータの蓄積と結果の公表を始めている。また、公園や河川の調節池、施設の付帯設備として各地でビオトープの整備が徐々に進められている。こうした公有地での整備は、開発でなくなることがないので極めて有効かつ重要である。

市内各地では、さまざまな市民活動団体が雑木林の下草刈りや水田の耕作、ビオトープの維持管理など具体的な保

全作業を展開しており、事例がわずかず増加している。

いずれの場所でも、自然環境を保全するためには手をかける必要があるとの基本認識から、市民と行政でそれぞれにできることを協議しているのが特徴である。一方で、活動を継続するための資金や、人材育成の面で苦戦している団体も多く見られる。

ビオトープとして整備されている場所や活動が活発な場所は、見沼田んぼや河川沿い、台地の縁などに集中しており、都市部や台地内部にはほとんど存在しないことが図からも読み取れる。こうした場所はかつて、畑地や草地、雑木林であったが、水辺に比べて早期に開発が進められてきたため、残存している環境自体が乏しいことも理由の一つだろう。

## さいたま市自然環境保全活動ホットマップ



## さいたま市の生物多様性保全施策

さいたま市の環境基本計画は2010年度に改訂を行った。ちょうどCOP10（生物多様性保全条約第10回締約国会議）名古屋会議が開かれたタイミングであったが、それまで「自然環境」という表現であった項目を「生物多様性」というキーワードを基にリニューアルすることとなり、環境審議会とは別に専門委員会を設けて集中的に審議することとなった。当NPOからは2人のメンバーがこの委員会にそれぞれの立場で参加して議論と答申の作成を行った。委員会ではまず、生物多様性の保全という視点で、さいたま市に具体的な施策やその基盤となる情報が「存在しない」ことを確認。生物多様性をめぐる世界的な動きや保全の重要性、さいたま市の現状から現在地を示しつつ、これから進むべき方向性について、42ページの報告書をまとめた。

環境審議会はこの答申のエッセンスを環境基本計画の3ページに凝縮。これをさいたま市の生物多様性保全地域戦略として位置づけている。この中では具体的な保全策についての言及はないものの、現状を認めつつ、生きもの情報の蓄積や市民意識の啓発などから始めていくことを目標として掲げている。

## 提案—市民参加による生物多様性保全に向けて

### 1. 市民の理解と参加の促進

生物多様性の保全は、残念ながらまだまだ社会の基本的な認知が低い。さいたま市環境白書では、生物多様性というワードに関するさいたま市民の認知度は、2010年の35%をピークに年々減少傾向にあり、2013年度は25%となっている。例えば、樹林が近隣住民による「落ち葉被害」によって伐採されてしまうことに象徴されるように、基本的な理解不足は保全どころか減少を招いており、理解の推進は急務であると言える。

また、保全の現場においても市民の参加は不可欠である。公共予算削減や公共用地が限られているという状況下、保全活動を行う主体や場の確保に、市民の参加は欠かせない。本来、地域の環境は地域の営みによって守り育てられてきたものでもあり、市民が主体となってこれらに取り組む必要がある。

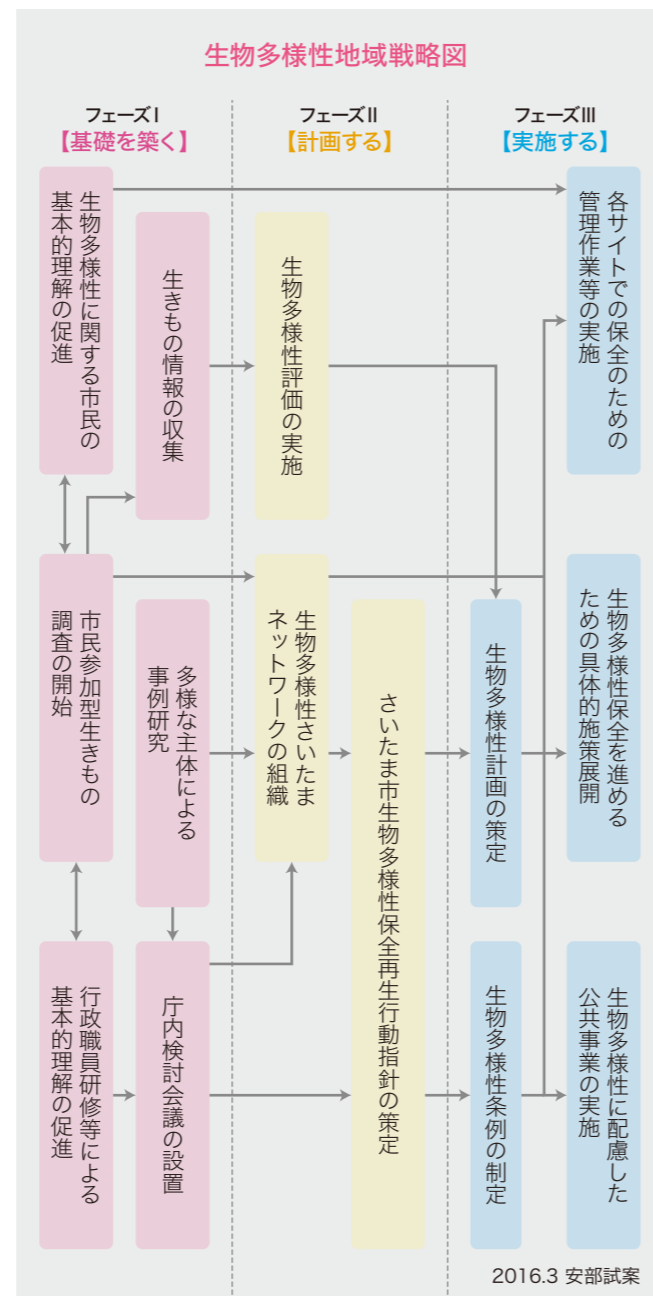
### 2. エンパワメントの仕組みを

市民が主体的に保全の役割を担うのに対し、これらの取り組みをエンパワメント=力づける仕組みが不可欠である。活動を行うには、道具や費用、場所などが必要となるが、これらを行政や事業者が支援する仕組みを構築できなければ、

取り組みはやがて疲弊してしまう。また、行政はこれらの取り組みを後押しする政策的な位置づけや、計画の策定、情報の共有を市民と積極的に進めていくべきだ。

### 3. 戦略の共有を

前述の専門委員会では、生物多様性地域戦略のイメージ図を4つの戦略目標と3つのフェーズから図示したが、これを再構築したものを提案したい。多面的に、効果的に取り組みを展開するためには、基本的な方向性を共有しつつ、各目標についての進行状況を確認し、連携することが重要である。この戦略図がその羅針盤となることを期待する。



生物多様性は我々の生存を支える重要な要素である。地球規模で考え、地元からそれぞれが主体的に行動することが、保全を進める一歩になると信じている。  
【文責：安部邦昭】

# Report

つくたまプロジェクトレポート

## つくたまの見沼田圃プロジェクト

つくたまは、設立前後から見沼田圃に関心を持ち、その保全と活用に取り組んできた。20世紀の後半、見沼田圃の旧浦和市・大宮市の境界部には、供給処理施設、工場、倉庫等が多く立地した。浦和、大宮、与野が合併してさいたま市となり、岩槻も併せて政令指定都市・さいたま市になった現在、見沼田圃は市域の中央に位置する広大な緑農空間であり、さいたま市の最も重要な資産であると考えている。

近年、つくたま独自の事業は行っていないが、他団体との連携や協働による取り組みを続けている。これからも見沼田圃を未来に継承していくために活動していきたい。

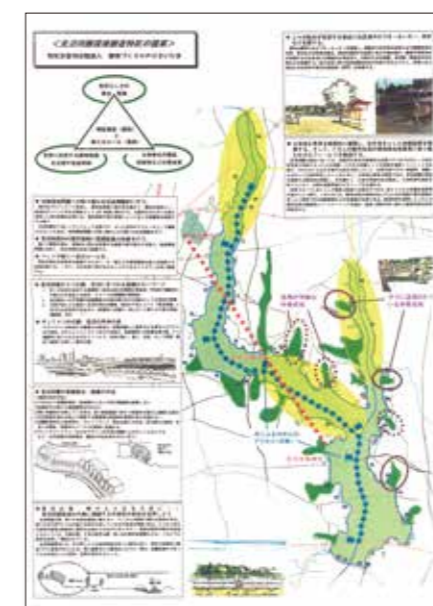
2000年1月	新世紀都市計画研究会として『政令指定都市ビジョン2000』を発行。その中で、「見沼セントラルパーク構想」を提案
2002年7月	さいたま市の「わたしが描く見沼田圃将来アイデア募集」に応募、2点が優秀賞を受賞
2003年	東大・大方研と協働し、ウェブでの情報収集地図「見沼田圃カキコまっぷ」を作成、運用
2003年～	見沼代保全倶楽部、水のフォルムが主催する市民による伝統的水田耕作に参加
2004年9月	見沼田圃水田利用調査を実施
2007年～	さいたま百景選定市民委員会に参加、見沼田圃における巡回ツアー等を実施
2011年	埼玉県風景づくり支援データベースの作成に伴う「加田屋風の廊下」等の調査
2014年5月	見沼景観形成ビジョン研究会に参加

### 見沼田圃将来アイデア募集 (2002年7月)

さいたま市企画調整課による「わたしが描く見沼田圃将来アイデア募集」につくたまとして応募。「見沼田圃環境創造特区」、「見沼水網再生計画」の2点が優秀賞を獲得した。そこで提案した将来像イメージは、その後のつくたまの活動に引き継がれている。

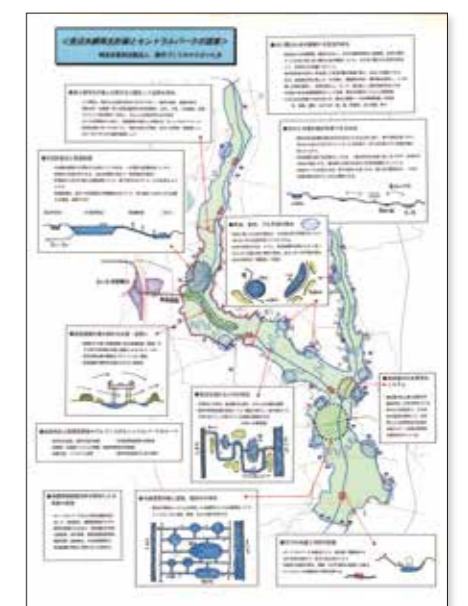
別に、メンバーが個人で応募した「見沼田圃水の博物回廊構想」が最優秀賞を受賞。

【文責：中津原努】



### ●見沼田圃環境創造特区

地球環境問題に取り組む社会実験/景観保全・整備の作法/見沼は海：岬や入江を大切に!/等



### ●見沼水網再生計画

神池、竜池、うなぎ沼の復元/見沼を流れる小川の再生/芝川の舟運と河岸の設置/等

### 見沼セントラルパーク構想の提案 (2000年1月)

都市開発が進んでしまった、旧浦和市・大宮市の境界周辺部、さいたま新都心に近い部分において、自然環境を再生する構想を提案した。新市のシンボルプロジェクトとしての期待もあったが、わずか3.9haの「合併記念見沼公園」に矮小化されてしまったのは残念だ。



埼玉新聞 2014年10月1日

### 見沼田圃水田利用調査 (2004年9月)

水田が減少しつつある見沼田圃において、現在水田耕作が行われている部分とともに、地盤面等からみて水田の復活が可能な部分がどれくらいあるかを調査。多くの部分で水田の復活が可能な状態にあることが分かった。これは遊水機能維持の点からも重要であるが、近年では大規模な埋め立てが進行している。見沼代保全倶楽部、芝浦工業大学、埼玉大学が調査に協力。





# つくたま<sup>な</sup>人々 5

## 中口 毅博さん

【芝浦工業大学システム理工学部教授 地域創生・環境政策研究室・つくたま正会員】

### 【プロフィール】

1959年三島市生まれ。筑波大学、東京工業大学で学び、2001年から芝浦工業大学で教える。環境自治体会議事務局長他。オーボエ演奏が趣味。

### 内子町に関わっていること 自治体の環境政策に必要とされること

愛媛県内子町にはESD「持続可能な地域づくり教育」のコーディネーターとして3年前から本格的に、濃密に関わっている。自治体の内部での難しい意思決定過程にもかかわらず、長期間滞りながら、小中学校の環境教育を中心に地域での活動をしている。

今、自治体が取り組むべきテーマは、持続可能な地域づくりだ。そのなかでもエネルギーの自立が重要と考えている。地域は自分たちの使うエネルギーを選ぶことができる、更には太陽エネルギーやバイオマスエネルギーなどにつくることもできる。自治体の意思でエネルギーを選択する「エネルギー自治」という視点だ。定期的に訪問しているドイツ・フライブルクでは公営企業でやっている。環境負荷の少ない電気の購入にあたり、どのような種類の電気を買うかを自治体が決めており、自治体が主体的にエネルギー政策を実施していない日本とは大きく違う。

### 大学の研究室で試みていること 研究の方向、学生たちへの期待

「地域創生・環境政策研究室」という研究室名に込めた思いは、狭く環境だけやっつけても、地域の環境を守れないという想いを込めている。環境を守るには、人とお金が必要だ。環境に投資できるお金を、地域でものを循環させながら生み出すシステムをつくりたい。そして、人づくりが重要で、若い世代が地域に愛着を持ち、地域のために役立つという思いを育てたい。

学生たちに関心を持ってもらうには、まず授業にすることが第1ステップだ。学生

たちを授業として内子町に連れていくのは2年目だ。現在の3年生、2年生が4年生になって、どんな関わりを持っていくのが楽しんだ。すでに2週間泊まり込んでインターンシップをした2人が出るなど、リピート参加者が増えている。さいたま市関連では、3年生が演習で複合的な政策の提案をしている。学生たちは市役所各課でヒアリング調査し、現地調査もする。提案は市役所で発表会を行い、市職員に聞いていただいている。しかし2つの問題があると思う。第1は、学生が提案を自ら実現していくことまで至っていない。2つ目は、市役所側で提案を取り入れるしくみがない。また、市内の大学が参加する「学生政策提案フォーラム」では、市長も参加して発表会があるが、優秀賞を取った提案が実現したとはあまり聞いていない。是非、フレッシュなアイデアの実現に向けて動いて欲しい。

### わかりにくい「生物多様性」を 市民の身近なテーマにしたい

票にならない生物多様性の政策にどうインセンティブを持たせることができるかを悩んでいる。自治体の首長が振り向くためには、貴重な動植物の生息環境を作り出すことが地域おこしにもなると考えたらどうか。

私が事務局長を務める環境自治体会議は、現在49の市区町村が加盟しているが、自治体に特徴のある動植物を調べ、各自治体が指標となる生物を選定しそれを維持することを目標にしようとしている。名古屋宣言以降の国家戦略を国（環境省）がつくり、自治体は地域戦略を作ることになっている。しかし既にさまざまな計画が

乱立している、自治体の規模や特性によっては既存計画に組み込むなどの検討が必要だ。

これまで開発抑制が自然保護のように言われてきたが、都市の縮退という今日的な課題に合わせた対応が必要になる。放置して自然に戻るということは無理で、人の手が入ったところは、継続的に維持管理することが大事だ。都市近郊緑地も地方の中山間地域も、都市住民を巻き込んだりして、多様性を人の手で維持する仕組みが必要だ。

市民活動を担ってきた環境団体のメンバーの高齢化が心配だ。子育て世代や働き盛りの世代が入りやすいプログラムが必要だ。

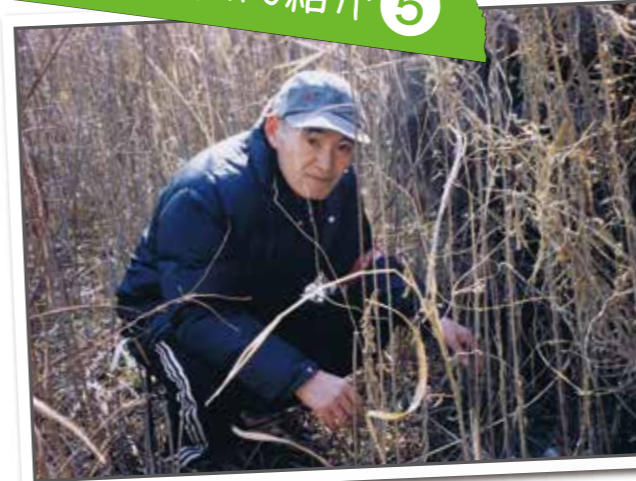
内子町では、学校外でやる自然観察に保護者の方々が見守り隊として参加してもらえるようになってきた。自分の子供が学校で何をしているかには関心を持つ親が多い。見沼田んぼでも米作りに子育て中の奥さんが積極的に参加している。子供と一緒に楽しめる工夫が大事だ。あまり真面目すぎる活動は広がらない。広げる努力や、少人数のティープな参加よりも100人などの軽い参加が大事である。そういう社会づくりに貢献していきたい。

【レポート：若林祥文】



内子町歴史民俗資料館(商いと暮らしの博物館)

## まちづくりNPO紹介 5



## 埼玉県生態系保護協会 大宮支部

【設立】	1984年
【法人形態】	公益財団法人の支部
【代表】	小松 豊蔵さん
【会員数】	約250人
【住所】	さいたま市西区水判土441-20
【E-mail】	reon11one@yahoo.co.jp

### 会の設立と活動の趣旨

埼玉県生態系保護協会の前身である、埼玉県野鳥の会の発足と同時に設立された最も古い支部の一つで、現在、県内に31ある支部の一つ。主に旧大宮市のさいたま市西区、北区、大宮区、見沼区を活動エリアとしているほか、さいたま市全域に関しては浦和、岩槻の両支部と連携した取り組みを展開している。

### これまでの実績や主な成果

#### ●さいたま市エコ・マップの作成

さいたま市内の将来のために保全すべき自然環境を図示した「さいたま市エコ・マップ」を、浦和、岩槻支部と連携して2002年に作成した。

#### ●秋葉の森総合公園に、自然保護ゾーンを

さいたま市西区中釘に旧大宮市が造成を進めようとしていた「西部スポーツ広場(仮称)」公園の計画について、計画地の豊かな里山の環境を残すべきとの観点から、市と交渉を開始。調査の結果、貴重な動植物の生息が確認されたこともあり、市と継続

的に根気よく協議を重ね、利用ゾーンと自然保護ゾーンを設けた新しい公園としてのオープンにこぎ着けた。2009年には「これからの公園づくり」を発行、指定管理を行うさいたま市公園緑地協会も加えた三者で、協働の公園管理を継続して行っている。管理作業としては、除草や古木・倒木の処理、つる性植物のクズや外来植物の除去や、沼の陸地化を防ぐための作業に日々汗を流す。「ただ反対しても、何も産まれない。根気よく対話を重ねることで、ここまでこぎ着けた。我々としても言ったことには責任を持ち、保全するための作業や活動を続けていきたい」と話す。



秋葉の森は里山の森。人の手による管理が欠かせない



公園予定地の湿地は、上尾市との市境に位置することが不安要素の一つとなっている

### 今後の課題や方針

メンバーの高齢化や、作業の担い手不足は課題。この活動は息の長い任務なので、実現に向け努力を続けると共に、子供たちと自然の中で一緒に遊びながら学ぶなどの活動を通して、裾野を広げていきたい。【小松豊蔵】